

対訳西鶴全集 十二

日本永代蔵

訳注

富麻
士生
昭磯
雄次

明治書院

麻生磯次<あそう・いそじ>

富士昭雄<ふじ・あきお>

〔略歴〕 明治29年生。

大正9年東京大学文学部国文学科卒業。

学習院院長をへて現在日本学士院会員。

文学博士。

〔略歴〕 昭和6年生。

昭和30年東京大学文学部国文学科卒業。

駒沢大学文学部教授。

対訳西鶴全集 一二

日本永代藏

二八〇〇円

高陽堂製本

昭和五〇年四月二十日印刷
昭和五〇年四月二十五日発行

著者 麻生磯次
富士昭雄

発行者 明治書院
代表 三樹彰

印刷所 大文堂
代表 梶原忠幸

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の十六
電話 二九四一五三三六
振替 東京 三一四九九一

©一九七四 麻生磯次

0393-24812-8305

凡 例

一 本書は上段に原文を翻刻し、下段にその対訳文を収載した。

一 本文の作成にあたっては、最も信頼できる初板本を底本に選び、さらに諸本を参照して、可能な限り原文を忠実に翻刻するように努めた。挿絵はそのすべてを本文該当箇所に収めた。ただし、行移り・丁移りは原文によらず、なお適宜段落を設けた。会話に相当する部分に「」印をつけた。

一 句読点 『永代藏』の原文では黒丸・点と白丸・点が混用されていて、その位置も必ずしも厳密なものではない。そこで本書では、諸注を勘案して新たに句読点をつけた。

一 漢字の翻字は、次のような方針によった。

1 正字体 原文の正字体はそのまま正字とした。ただし一般に通用されていない正字体の活字はこれを避けた。

(例) 閒↓間 疊↓疊

2 略字体 原文の略字体の内、現在も行われているものはそのままとした。これらの中には俗字・通用字等があり複雑であるが、しばらく略字として扱う。(例) 塩、釈、条、声、体、才、仏、宝、万、礼

ただし、右と同じ字でも正字を用いてある場合や、正字の行草体とまぎらわしい次のような略字は、正字に翻字することにした。(例) 榮、賞、勸、観、婦、国、齒、断、変、来、恋

- 一 特殊な略体および合字、連体字は現行の字体に改めた。(例) け↓候、お↓より、ふ↓参らせ候
 - 一 語注 本文読解の便宜をはかつて、各章の終りに語釈を注記した。
 - 一 付録 西鶴の読解鑑賞の一助として、巻末に本巻所収作品の「解説」ならびに「付図」を収めた。
- 「付図」は、「日本永代藏」に関係の深いものを選んだ。なお、本全集の他の巻々の「付図」もあわせて参照してほしい。

- 一 索引 「日本永代藏」を理解する上で、重要と思われる語句を選び、巻末にその語句索引を掲げた。

本巻の本文挿絵および「付図」の作品資料は、国立国会図書館所蔵の『日本永代藏』、を使わせていただいた。また「付図」の元禄五年暦は国立国会図書館所蔵本によった。

本文の注釈では、先学の研究成果をできるだけ参照したが、特に野間光辰氏校注『西鶴集下』（日本古典文学大系）、前田金五郎氏編著『新注日本永代藏』（大修館書店）、に教示を受けるところ大であった。巻末の語句索引の作成には、長谷川八重子氏の御助力を得た。

以上の方々に、ここに記して深謝の意を表します。

目次

凡例

日本永代藏

卷一

目録

一	初午は乘てくる仕合	二
二	二代目に破る扇の風	四
三	浪風靜に神通丸	九
四	昔は掛算今は當座銀	一五
五	世は欲の入札に仕合	二五

卷二

目録……………三

一 世界の借屋大將……………三

二 怪俄の冬神鳴……………四

三 才覺を笠に着る大黒……………五

四 天狗は家な風車……………六

五 舟人馬かた鎧屋の庭……………七

卷三

目録……………七

一 煎じやう常とはかはる問藥……………七

二 國に移して風呂釜の大臣……………八

三 世はぬき取の觀音の眼……………九

四 高野山借錢塚の施主……………九

五 紙子身袋の破れ時……………九

卷四

目録……………一〇

一 祈るしるしの神の折敷……………一〇

二 心を疊込古筆屏風……………一五

三 仕合の種を蒔錢……………二〇

四	茶の十徳も一度に皆……………	二七
五	伊勢多びの高買……………	一三

卷 五

	目 録……………	一四
一	廻り遠きは時計細工……………	一四
二	世渡りには淀鯉のはたらき……………	一五
三	大豆一粒の光り堂……………	一六
四	朝の塩籠夕の油桶……………	一六
五	三匁五分曙のかね……………	一七

卷 六

	目 録……………	一六
一	銀のなる木は門口の柵……………	一八
二	見立て養子が利發……………	一八
三	買置は世の心やすい時……………	一九
四	身軀かたまる淀川のうるし……………	一九
五	智恵をはかる八十八の升撮……………	二〇

日本永代藏解説……………	二〇
--------------	----

付 圖

.....

三三

主要語句索引

日本永代藏

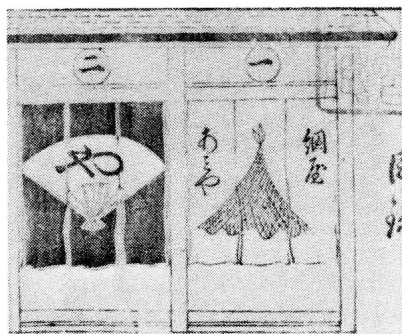
大福新長者教

一

日本永代藏

卷一

目錄



初午は乗て來る仕合

江戸にかくれなき俄分限

泉州水間寺利生の錢

二代目に破る扇の風

京にかくれなき始末男

壹歩拾ふて家乱す悴子

一 二月の初めの午の日。水間寺の縁日。午(馬)・乗つて來るは縁語。初午の日に水間寺に参詣すると幸運が授かるといわれたが、本當に水間寺初午の借錢で成功した者が出て、莫大な返納金を江戸から通し馬で運んだという話。

二 知らない者がいない。本書の副題は、巻五の二を除き、この語を用いた形式をとる。

三 にわか成金。

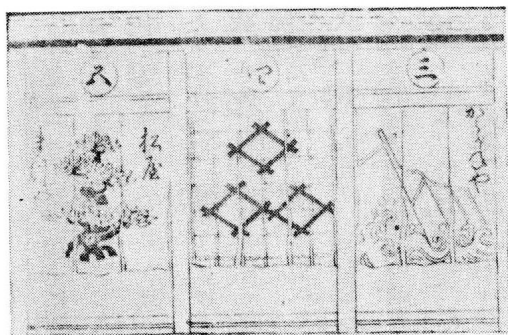
四 大阪府貝塚市水間の天台宗竜谷山水間寺。本尊は聖観音。

五 御利益(ごりやく)のある錢。

六 二代目になって扇屋が破産した話。破る・扇・風は縁語。ここの「風」は家風、家業の意。

七 一步判金。金一両の四分の一。巻末付図参照。

八 息子。当時世仲・縣などとも書く。



浪風靜に神通丸なみかぜしづかにんとうまる

和泉にかくれなき商人いづみにかくれなきあき

北濱に箒の神をまつる女きたばしはきのかみをまつるを

昔は掛算今は當座銀むかしかけざんいまたうざぎん

江戸にかくれなき出見せえどにかくれなきでし

壹寸四方も商賣の種いちすんぽうもしょうばいのたね

世は欲の入札に仕合よはよくのいれふだにあはせ

南都にかくれなき松屋がなんとにかくれなきまつやが

跡式あとしき

後家は女の鑑となる者ごけをんなのかさみとなるもの

九 大きな神通丸が、その名のように神通自在に荒海を乗り切って交易し、船主が次第に繁栄した話。本話はこれと関連して商都大坂の活況や成功談を描く。

一〇 大阪府泉佐野市の豪商唐金屋庄三郎のこと。

一一 大阪市東区北浜一丁目から五丁目までの、大川沿岸の地。大坂の米市は元禄十年ごろまで北浜四丁目淀屋橋付近にあり、この辺には大小の米問屋があった。当時はキタバマという。

一二 本文によると祭ったのは女の息子の方。

一三 昔は掛売り、今では現金売りが新商法になった話。「掛算」は、ここでは掛売り算用のこと。「当座銀」は現銀。当時上方は銀を中心とした経済であったので、江戸で現金というところを、現銀という。

一四 支店。江戸の呉服店は、多く京都に本店があった。

一五 欲の世の中というが、人の欲心を利用して富突きを催し、家運をばん回した話。

一六 奈良。

一七 奈良の晒(さらし)問屋、東城戸町の松屋作兵衛(奈良曝・貞享四年)の一族か。

一八 遺産。

初午は乗てくる仕合

初午は乗てくる仕合せ

天道言^{てんたうごん}ずして、國土^{こくど}に恵^{めぐ}みふかし。人は實^{じつ}あつて、偽^{いつはり}りおほし。其心^{こころ}は本虚^{もときよ}にして、物^{もの}に應^{おう}じて跡^{あと}なし。是^{これ}、善惡^{ぜんあく}の中^{なか}に立て、すぐなる今の御代^{ごよ}を、ゆたかにわたるは、人^{ひと}のたるがゆへに、常^{つね}の人^{ひと}にはあらず。一生^{しやう}一大事^{いちだいじ}、身^みを過^するの業^{わざ}、士農工商^{しのうこうしやう}の外^{ほか}、出家^{しゆつけ}・神職^{しんしやく}にかぎらず、始末^{しまつ}大明神^{みやうじん}の御^ご託宣^{たくせん}にまかせ、金銀^{きんぎん}を溜^たべし。是^{これ}、二親^{ふたおや}の外^{ほか}に命^{いのち}の親^{おや}なり。人間^{にやう}、長^{なが}くみれば、朝^{あした}をしらず、短^{みづか}くおもへば、夕^{ゆふ}におどろく。されば天地^{てんち}は万物^{ばんぶつ}の逆旅^{ぎやくりよ}、光陰^{くわういん}は百代^{ひやくたい}の過客^{くわかく}、浮世^{うきよ}は夢^{ゆめ}とあり。時^{とき}の間^まの煙^{けふり}、死^しすれば何ぞ、金銀^{きんぎん}、瓦石^{ゐはせき}にはおとれり。黄泉^{くわうせん}の用^{よう}には立^{たち}がたし。然^{しか}りといへども、殘^{のこ}して子孫^{そん}のためとはなりぬ。ひそかに思ふに、世^よに有程^{あるほど}の願^{ねが}ひ、何^{なに}によらず銀徳^{ぎんとく}にて叶^{かな}はざる事^{こと}、天^{あめ}が下^{した}に五^いつ有^あ。それより外^{ほか}はなかりき。是^{これ}にまじたる寶船^{たからふね}の有^あべきや。見ぬ嶋^{しま}の鬼^{きに}の持^も

天は何もいわないで、國土に深い恵みを与える。ところが人間は誠実でもあるがまた虚偽も多い。人の本心は元來空虚なものであつて、外物に應じて善ともなり惡ともなるけれども、それは鏡に影がうつるようなもので、跡形を残すものではない。こういう善と惡との世の中にあつて、正しい政道の行われている今の御代を、何不足なく豊かに渡つて行くのは、人のなかの人ともいふべき選ばれた者で、決して凡庸な人間ではない。人間生涯の大事は、世渡りの道にはかならないのであるから、士農工商はいふまでもなく、僧侶・神職にかぎらず、どういふ職業にあつても、儉約の神様の御託宣に従つて、金銀をためるうにしなければならぬ。この金銀というものは、両親のはかの命の親である。人間の命は、これを長いと思つても明朝はどうなるかわからないし、短く考えると今夕にも迫っているかわからないものである。そこで中国の詩人も、「天地は万物の逆旅、光陰は百代の過客、浮世は夢のごとし」といつている。まことにこの宇宙というものは、森羅万象を送迎する宿屋のようなものであり、月日は永劫の間を一日

し隠れ笠・かくれ蓑も、暴雨の役に立ねば、手遠きねがひを捨て近道に、それ／＼の家職をはげむべし。福德は其身の堅固に有、朝夕油斷する事なかれ。殊更世の仁義を本として、神仏をまつるべし。是、和國の風俗なり。

折ふしは春の山、二月初午の日、泉州に立せ給ふ水間寺の觀音に、貴賤男女參詣ける。皆信心にはあらず、欲の道づれ、はるかなる苦路、姫萩・萩の焼原を踏分け、いまだ花もなき片里に來て、此佛に祈誓かけしは、其分際程に富るを願へり。此御本尊の身にしても、独り／＼に返言し給ふもつきず、「今此娑婆に、瓢どりはなし。我頼むまでもなく、土民は汝にそなはる。夫は田垂て、婦は機織て、朝暮其いとなみすべし。一切の人、此ごとく」と、戸帳ごしにあらたなる御告なれ共、諸人の耳に入ざる事の淺まし。

それ世の中に、借銀の利足程おそろしき物はなし。此御寺にて、万人かり錢する事あり。當年壹錢あづかりて、來年貳錢にして返し、百文請取、貳百文にて相濟しぬ。是、觀音の錢なれば、いづれも失墜なく、返納したてまつる。をの／＼五

初午は乘てくる仕合

一日と旅行する旅人にも似ている。短い人生はまるで夢幻のようにはかないものだ。人間も茶毘一片の煙となつて、時のまに消えてしまふ。死んでしまえば金銀もなんの役に立とうぞ、瓦や石にも劣るものだ、冥土ではなんの役にも立たない。そうにはちがいないが、しかし、残しておけば、子孫のためになるものである。ひそかに考えて見るに、世の中のあらゆる人間の願いは、何によらず金銀の力でできないことはない。ただその力でも及ばないものが天地の間に五つある。それは生・老・病・死・苦の五つである。このほかには決してないのである。だから金銀にまさる宝物が世の中にあるはずはないのだ。だれも見たことのない鬼が島の鬼が持つという隠れ笠や隠れ蓑にしても、姿を隠すことはできても、俄か雨の時の役には立たない。そんな宝物を手に入れようなどという縁遠い願いを捨てて、手近なところでめいめいの家業をはげむがよい。福德を得ようと思えば、身持ちもからだも堅固に保たなければならぬ、朝夕油斷してはいけぬ。殊に世間の義理人情を重んじて、神や仏を信仰するがよい。これが日本古來の風習である。

時節は山も春めく二月初午の日、和泉の國に鎮座します水間寺の觀音に、貴賤男女が大ぜい參詣する。これらの人々は信心からお詣りするのではない。みな欲の道連れがあつて、はるばると

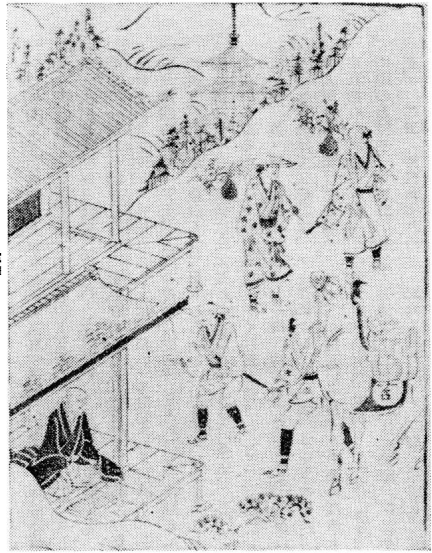


錢・三錢、十錢より内をかりけるに、爰に年のころ廿三四の男、産付ふとくたくましく、風俗律義に、あたまつき跡あがり、信長時代の仕立着物、袖下せはしく、裾まはり短く、うへした共に、紬のふとりを無紋の花色染にして、同じ切の半襟をかけて、上田嶋の羽織に、櫛うらをつけて、中脇指に柄袋をはめて、世間かまはず尻からげして、爰に参りし印の、山椿の枝に野老入し髭籠取そへて、下向と見えしが、御寶前に立寄て、「借錢壹貫」と云けるに、寺役の法師、貫さ

しながら相渡して、其國・其名をたづねもやらず、彼男行がたしれずなりにき。

苦むす山路をたどり、姫萩や萩の焼原を踏み分け、まだ花も咲かない片田舎までやって来て、ここの仏に祈るのである。それというのも、分相応に金持になりたいという願いからである。この御本尊の身にしても、参詣のひとりひとりに御返事なされるのもきりがなく、「今この世知辛い世の中に、濡れ手で粟を擲むようなぼろい儲けはない。わしを頼むまでもなく、農民には農民に備わった職分があるのだから、夫は野良に出て耕し、妻は家において機を織り、明け暮れめいめいの仕事をばげむがよい。農民に限らず一切の人間は皆この通りにせよ」と、戸帳越しにあらたかなお告げをなさるのだが、参詣の人々の耳に入らないのは、人間のあさましさで仕方のないことである。

さてこの世の中に、借金の子利ほど恐ろしいものはない。この水間寺から多くの人々が金を借りる風習があった。今年一文借りると、来年は二文にして返し、百文受け取れば二百文にして返済することになっていた。これは観音様の銭だから、だれも間違はなくお返しするのである。大ていの人はめいめい五文とか三文とか、十文以下を借りたのであるが、ここに年のころ二十三、四の男がいた。生まれつきからだが大く逞ましく、身なりが質朴で、髪も後上がりに野暮に結び、信長時代に仕立てたような古風な着物で、袖丈がつまり、裾まわしは短く、上着も下着も共に紬の太



寺僧あつ
まりて、
「當山開
闢より此
かた、終
に壹貫の
銭かした
る例な
し。借人

是がはじめなり。此錢濟べき事共思はれず。自今は、大分に
かす事無用」とさたし侍る。

其人の住所は、武藏江戸にして小網町のすゑに、浦人の着
し舟間屋して、次第に家榮へしをよろこびて、掛硯に「仕合
丸」と書付、水間寺の銭を入置、獵師の出船に、子細を語り
て、百文づゝかしけるに、かりし人自然の福有けると、遠
浦に聞傳へて、せんぐりに毎年集りて、一年一倍の算用に
つもり、十三年目になりて、元壹貫のぜに八千百九拾貳貫に

初午は乗てくる仕合

織を無地の縹色染めにして、同じ切の半襟をかけ、上田縞の羽織
に木綿裏をつけたのを着ている。中脇差に柄袋をはめて差し、見
えもかまわず尻はしよりして、この寺に参詣した印として、山椿
の枝に野老を入れた髭籠をくくりつけて担いでいる。参詣をすま
してもう帰るところらしく、御仏前に立ち寄つて、「銭一貫文拝
借したい」と申し入れた。寺の役僧がなんの気なしに貫繒のまま
渡して、その国も名も尋ねもしないうちに、その男はどこへ行つ
たかわからなくなつてしまつた。あとで寺僧が集まつて、「この
寺が創つて以来、ついぞ一貫文という多額の銭を貸したためし
がない。こんなに借りたのはこれが初めてだ。この銭は返りそうに
も思えない。今後は多額には貸さないがよい」と話し合つた。

その男の住所は、武藏の江戸で、小網町の片端に、諸国の漁民
の舟着場があるが、そこで回漕問屋をしていた。しだいに家が繁
盛してきたのを喜び、掛硯に「仕合丸」と書きつけ、その中に水
間寺から借りた銭を入れておき、漁夫が舟を出す時に、その銭の
由来を話して、百文ずつ貸してやつた。すると借りた人は自然と
運が向いてきたというので、このことが遠い漁村にまで評判にな
つた。次々に借りては返す銭が毎年たまつて、一年二倍の勘定で
計算したので、十三年目には、元銭一貫文が八千百九十二貫の多
額になった。そこでこれを通し馬につけて東海道を運び、水間寺